

宮城県山元町巡見報告

伊藤 昂大*

藤田 悠佑**

1. 山元町の基本状況

1-1. 地勢

宮城県山元町は県の最東南端に位置し(図1)、東は直線的な砂浜海岸となって仙台湾に面し、西は阿武隈山地の北端をなす丘陵地帯が南北に連互して角田市に接し、南は福島県と境し、北は亶理町と続いている。東西約6km、南北約11kmと縦に長い長方形のような形をしており、総面積は約64km²である。丘陵は標高200m~300mの山地で、北部は狭く南部が広がっており、山麓部は傾斜をなして東部の平坦地へ伸び、山地と海岸の間に南から北に耕地が広々と展開している。

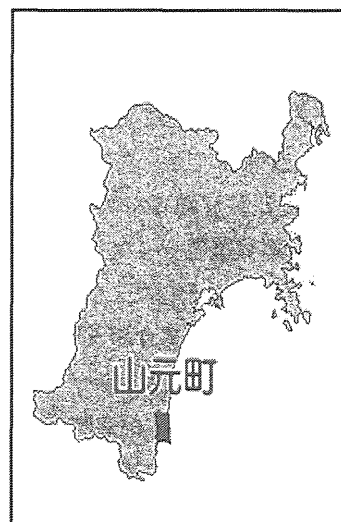


図1 山元町の位置

1-2. 人口

人口は昭和25年の18,370人をピークに減少を続け、昭和40年代後半からまた増加に転じたが、平成7年頃からまた現象を始めている。また、山元町の震災前(平成22年10月1日国勢調査)の人口は、16,704人であったが、震災後は大きく人口が減少し、平成23年10月1日現在の人口は14,628人となっている。また、その後も減少傾向は続いており、平成27年2月末現在では12,786人となっている。

1-3. 被災状況

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災により、山元町は大きな被害を受けた。山元町には15時50分頃津波が到達し、家屋の全壊は2,217棟(うち流出1,013棟)、大規模半壊534棟、半壊551棟、一部損壊1,138棟、海岸線から1.5kmの範囲ではほとんどの建物が流出した。浸水範囲面積は24km²で、これは山元町の総面積の37.2%に及ぶ。また、町民の死者

* 筑波大学人間学群教育学類3年

** 筑波大学人間学群教育学類3年

は 636 人に上った。

1-4. 施設

震災前、山元町には山下小学校、山下第一小学校、山下第二小学校、中浜小学校、坂元小学校の5つの小学校と山下中学校、坂元中学校の2つの中学校があった。しかし震災による津波の影響で山下第二小学校は山下小学校の教室を借りての運営、中浜小学校は坂元小学校と統合されることとなった。

また、町内には中央公民館と坂元公民館の2つの公民館があり、震災時には避難所としても機能した。

《参考資料》（以下 2015 年 3 月 29 日アクセス確認）

- ・山元町公式 HP <http://www.town.yamamoto.miyagi.jp/>
- ・山元町（2009）『山元町統計書（平成 19 年度版）』
- ・山元町（2011 年 12 月）『山元町震災復興計画～キラリやまもと！みんなの希望と笑顔が輝くまち～基本構想』

2. 巡見概要

2-1. 巡見スケジュール

< 7 月 7 日（月） >

13 時～14 時：山元町教育委員会訪問

森憲一教育長から山元町の被災状況についての説明

14 時 30 分～15 時 45 分：山元町巡見（1） ① 太陽団地から浜側被災地を概観
② 中浜小学校の遺構

15 時 45 分：山下中学校着

16 時～17 時 30 分：山下中学校生徒へのヒアリング

19 時：山元町復興住民会議「土曜日の会」の皆様と懇談（じーたんドーム）

< 8 日（火） >

10 時～11 時 30 分：山元町巡見（2） ① 元 JR 山下駅と写真館見学
② みんなのとしょかん見学

13 時～16 時 10 分：山元町巡見（3） ① Cafe 地球村（工房 地球村）
② 磯浜

16 時 10 分：坂元中学校着

16時30分～18時00分：坂元中学校生徒へのヒアリング

< 9日(水) >

10時～11時30分：「民話の会」の皆さんと懇談（山元町歴史資料館）

11時～：FMりんごラジオにインタビューを受ける（スタジオ）

2-2. 巡見参加者

筑波大学人間学群教育学類4年 山中拓真

筑波大学人間学群教育学類3年 飯塚真悟・伊藤昂大・川口理帆・竹渕連・藤田悠佑

3. 巡見詳細

3-1. 山元町教育委員会訪問（森憲一教育長）

山元町の森教育長からは、社会教育・生涯学習の意義や、山元町の子どもたちへのメッセージなどを伺った。震災後まもなくは、これまで社会教育などが担ってきた文化的活動について、「こんなことをやっているといいのか」という批判もあり、自粛する風潮があった。しかし、その文化的活動が生きがいとなり、生きる活力につながっていくことを、実際に森教育長は感じ、その生きがいの実現をサポートすることが社会教育・生涯学習に求められていると述べていた。

また、山元町の子どもたちに向けても、震災時の経験から協力し合うことの重要性を感じてほしいと述べ、山元町に縛られないグローバルな人材に育ててほしい、そのための「共助」を伝えることも社会教育の役割の一つであるということ語っていた。

3-2. 巡見（1）

3-2-1. 太陽団地（町民グラウンド応急仮設住宅・町民グラウンド北応急仮設住宅）

太陽団地は、山元町に9つある仮設住宅の内の、町民グラウンド応急仮設住宅と町民グラウンド北応急仮設住宅の別名である。訪問した時間が平日の昼ということもあってか、子どもたちや若い人々の姿は見受けられなかった。それも、全体としては閑散としているような印象を受けた。

また、太陽団地周辺から浜側の被災地を概観した。かつて家や店があったであろう土地が広く緑に覆われている様子は、津波の威力の凄まじさを未だに感じることができた。一方、瓦礫がほとんど撤去され、道路もある程度整備されている様子は、復興がまだまだながらも少しずつ進んでいる、という現状を感じさせた。

3-2-2. 旧中浜小学校

旧中浜小学校の校舎は今なお残されており、粉々に砕けた窓ガラスやひしゃげた柱などから

は、震災時の津波の威力がひしひしと感じられる。時間割が書かれたままの黒板などは、当時そこに確かに人がいたことを物語る。中浜小学校は震災発生時に校長の判断によりマニュアル通りではなく、学校の屋上にある倉庫に全校児童を避難させて一夜を明かし、その判断により死者が出なかった小学校である。校舎内への立ち入りは制限されているものの、当時の様子を生々しく残す校舎は今後も震災遺構として残されていく。なお、現在中浜小学校は坂元小学校と統合されている。

3-3. 山下中学校ヒアリング調査

今回の巡見では、山下・坂元の両中学校で1～3年生の生徒に「3.11 後社会を生きる中学生の『声』を聴くことを通して、被災地の現状を理解する」をテーマにヒアリング調査を行った。1日目に訪れた山下中学校では、1年生5名、2年生6名、3年生2名の生徒が協力してくれ、各学年に学生が2名、中学校の教員1名がついてヒアリングが行われた。協力してくれた山下中学校の生徒のみなさんはとても積極的に発言してくれ、震災当時の記憶を涙を浮かべながら語ってくれた生徒もいた。彼らの語りからは震災当時の様々な思いや、山元町への愛を感じる事ができた。

3-4. 土曜日の会（じいたんドーム）

1日目の夜、じいたんドームで土曜日の会の方々と会食しながらの懇談会が開催された。土曜日の会とは、毎週土曜日18時に山元町のお寺、普門寺に集まり山元町の復興のために情報を収集・勉強しながら意見交換をしている住民組織である。また、じいたんドームは、その土曜日の会のメンバーが中心となって作られた集会所である。「みんなのとしょかん」（後述）に併設されたビニールハウスであり、地域の人々が自由に集まれる場として作られた。

懇談会では今後の地域の在り方についての考えをメンバーの方々から聞く事ができた。リーダーを作らず、全員が臨機応変に対応しようという意識を持つことの重要性やご近所づきあいを通じた顔見知りによる防災の在り方、たとえ厳しい現実であってもそれを見つめて先に進まなければならないということ、実際に被災経験を乗り越えた方の例をとって聞く事ができたことは、非常に貴重な経験であった。また、同じ人に繰り返し話を聞くことによってその変化を感じる事、信頼関係を築いていくことの必要性も感じた。

（藤田悠佑）

3-5. 巡見（2）

3-5-1. JR常磐線山下駅跡

現在の旧山下駅に駅舎はなく、停車ホームのコンクリート部分を残すのみであった。ホームの両端からはどこまでも草木が生い茂り、そこに線路があるのをうかがい知るの難しい。

JR 常磐線山下駅は元々東北部の沿岸部を添うようにして沿線が伸びており、東日本大震災によって甚大な被害を受けた。一部は元の路線位置で復旧予定または復旧が完了したが、山下駅を含めた駒ヶ嶺～相馬間の路線は「まちづくりと一体となった復旧」を進めることを前提に、山側への移設が決定している。山元町もまた例外ではなく、行政の進めるコンパクトシティ政策は、移設をする新山下駅・新坂元駅を拠点として新市街地整備を進める方針だ。新山下駅周辺地域では2014年5月時点で用地取得率94%（面積割合）、基盤の盛土の進捗は全体の70.6%と着々とその下準備を進めている。一方、旧山下駅跡地はその後の処遇を遺構として残すといった案は現在出ていない。

3-5-2. みんなのとしょかん

「みんなのとしょかん」プロジェクトは、災害によってコミュニティの維持・再生が困難になった地域、過疎化の進む地域に図書館を設置することによって、コミュニティの醸成を促すことを目的としている。また、カルチャー教室の開催などにより地域の人々の生きがいがづくりや技術習得につなげようとする意図もある。主管は一般社団法人みんなのとしょかんで、栃木県足利市から始まったこのプロジェクトは東日本大震災の被災地を中心に、多くの地域へと広がりを見せている。

山元町には現在2か所に「みんなのとしょかん」が設置されており、私たちは山下駅近郊の「としょかん」に足を運んだ。プレハブの施設の中へ入ると、全国から支援された書籍がぎっしりと棚に収められていた。真ん中にはテーブルがあり書籍を手にとって読むことができるほか、本を借りるためのノートも置いてあった。ノートを見てみると、様々な世代の人たちがここを利用しており、被災地の中での数少ない世代間交流の場となっていることが分かった。

「みんなのとしょかん」への支援は支援金や書籍を寄付の他に、「一口館長」というユニークな制度がある。1か月1000円を一口として支援をすると、各地のとしょかんで「一口館長」として名前を記載してもらうことが出来る。実際に私たちが訪問した時も、壁にサポーターたちの名前を記載したボードが見受けられた。寄付や支援金というと、実際に現地に足を運ぶボランティアと異なり、相手に直接感謝をされることもないため達成感や充実感を得るのは難しい。このような名前を残す寄付は現地に行かずとも自分がその地域に貢献したという証明を残すことが出来る、新しい支援の形であろう。

3-6. 巡見（3）

3-6-1. カフェ地球村

カフェ地球村（以下、カフェ）は震災から2年目を迎える2012年11月にオープンした。医療・福祉施設「工房地球村」（以下、地球村）を前庭に、そのカフェはある。地球村は山元町唯一の障害者の働く施設である。正式名を「山元町共同作業所」といい、運営は山元町社会福祉協議会が行っている。

カフェの中に入ると、そこには白を基調とした落ち着いた雰囲気広がっていた。“本物の味にこだわった”というコーヒーを飲みながら、壁にかかった色とりどりの絵画を楽しむことができる。これらの絵画は、財団法人たんぼぼの家（以下、たんぼぼの家）が主催した、地球村でのワークショップによって作られたものだ。たんぼぼの家は「アートとケア」の観点で様々な価値観を認め合う社会づくりに励んでおり、山元町では地球村と共同で支援プロジェクトを進めている。その中で山元町には精神科がなく、障害者や家族をはじめとした「心の拠り所」となる施設の必要性が叫ばれ、カフェの建設に至ったという。カフェでは他にも町特産のリンゴやイチゴをデザインした手ぬぐいなどの、地域発のブランドで町の復興を応援したり、手作りのアップルパイやクッキーの販売を行ったりと、その活動は多岐に渡っている。

3-6-2. 磯浜

私達が訪れた磯浜は、現在工事用トラックやクレーン車が区画整備をしている中で、港に漁船が停泊していた。海岸線に沿って工事が進められている堤防は、海と陸を明確に分ける白線のように、印象的だった。

磯浜はかつて「東北の湘南」と呼ばれるほどのサーフィンの聖地であった。砂浜には多くの観光客で賑わっていた様子が、震災前の写真に見受けられた。また磯浜漁港は、宮城県有数の水揚げ高を誇るホッキ貝漁で有名だ。山元町のイメージキャラクター「ホッキーくん」や「ほつき祭り」といったイベントからも、ホッキ貝が町の象徴となっていることは明らかだ。

今回の巡見全体を通して、住民の方々はみな海を山元町の魅力として挙げていた。工事が完成した時、その風景は以前よりも大きく変わるであろう。しかし、住民の海に対する思いは震災を経ても変わることはなく、むしろより強く愛着が醸成されているのかもしれない。

3-7. 坂元中学校ヒアリング調査

国道6号線付近にある山元町立坂元中学校（以下、坂元中）は昭和22年に坂元村坂元中学校として開校した。平成7年には木造校舎を改装し現在の校舎に至っている。

巡検2日目に山下中学校（以下、山下中）と同様に中学生へのヒアリング調査をするために訪れた。坂元中では、各学年4名の生徒が協力してくれた。坂元中の生徒へヒアリング調査をして考えたのは、彼らは未来志向だということである。山下中の生徒たちはかつての山元町の風景や生活を懐かしみ、昔のような町を取り戻したいという声が強かった。一方坂元中の生徒たちは昔よりも便利に、ということ強く言っていた印象がある。この違いは思うに、中学生を取り巻く環境によるものであろう。坂元中の周りは工事による盛土の、茶色い風景が広がっていた。仮設住宅も多く、まだまだ避難生活を余儀なくしている人々が多い。さらに坂元中の生徒数も山下中に比べると圧倒的に少ないことも違いに挙げられる。まわりの景色が震災から4年が経過してもあまり変わらず、人も少なくなっている状態から、早く解放されたいという感情が募っていったのではないだろうか。また将来の夢について質問した際の東京や仙台に行

って働きたいという回答も、そういった環境要因によるものではないかと推測している。

3-8. やまもと民話の会

「やまもと民話の会」(以下、民話の会)は1998年(平成10年)の5月に発足した。発足当初は前年の山元町歴史民俗資料館企画展“むかしむかしざっと昔”に参加した方々で構成されていた。現在の活動は山元町老人クラブ連合会の編集する「民話」を語り直し、町内の保育所、学校、施設等で語るほか、町内に残る民話の探訪や再話を行っている。震災以降は、町内の人々の被災体験や証言をまとめた「小さなまちを呑みこんだ巨大津波」(全三集)を発行し、震災経験を後世に「語り継ぐ」ことに尽力している。また毎週火曜日には後述するFMりんごラジオへ出演をして、ラジオを使っの民話の普及に努めている。

3-9. りんごラジオ

臨時災害放送局「りんごラジオ」は、東日本大震災で被災した山元町から被災者・避難者・町外にタイムリーな情報を届けている。そもそも臨時災害放送局とは災害発生時に市町村が開設できる臨時のFM放送局である。これは放送法第8条「臨時かつ一時の目的のための放送」、そして108条にある災害の「発生を予防し、又はその被害を軽減するために役立つ放送」にも定められている。東日本大震災においては24の市町29の放送局が開設され、被災者に向けた被害情報や安否情報、給水情報等を届けた。震災から4年が経過した現在においても一部の災害臨時放送局は継続して運営をしており、山元町のりんごラジオもまた地域のコミュニティラジオとして健在している。

私達は巡見最後の訪問地として、このりんごラジオを訪れた。当初の放送は町から届けられた情報を被災者に伝えることが主だったが、スタジオにあった番組表を見てみたところ、現在では住民自らが番組に出演しこのラジオを作っているということが分かった。震災の影響により物理的に離されてしまった人々がいる現状がある中で、住民たちが番組を住民たちが聴くという、つながりの循環を生み出すことの意義は大きい。

(伊藤昂大)

《参考資料》(以下2015年3月30日アクセス確認)

- ・山元町公式HP <http://www.town.yamamoto.miyagi.jp/>
- ・東日本旅客鉄道仙台支社(2012年3月5日)『常磐線の復旧について』
<http://www.jr-sendai.com/doc/20120305a.pdf>
- ・みんなのとしよかん <http://www.mintosho.org/>
- ・アートによる生きる力のとりもどし 「カフェ地球村」ができるまで
宮城県山元町「工房地球村」の実践

- ・磯浜漁港 <http://sendai-web.com/watayama/yamamoto/isohama.htm>
- ・坂元中学校 HP <http://www.yamamoto.ed.jp/sakamoto-j/>
- ・やまもと民話の会『小さな町を呑みこんだ巨大津波』第1集 2011年4月1日、第2集 2011年12月1日、第3集 2012年4月1日
- ・総務省『今後に備えて臨時災害放送局災害の手引き』
http://www.soumu.go.jp/main_content/000320172.pdf

4. おわりに

今回の巡見訪問では、立場や世代を問わず様々な住民の方々から「生の声」を聴いてきた。そこで特に印象的だったのが、住民たちが自らの被災経験を「伝える」ことで社会に還元しようとしている姿勢である。前述したやまもと民話の会やりんごラジオの他にも、宿泊場所を提供してくださった吉野政男さんについて感謝の意とともにここに記しておきたい。

吉野さんは食後、私たちに震災前後の人々のリアルな話を語りかけてくださった。震災の前日に大きな余震があった際、山元町は四方山（山元町と角田市、亘理町の境にある山）があるから大丈夫だという考えが住民たちの間にあり、危機意識があまりなかったということなどは、どの文献や報道からでも知りえなかった情報だった。震災を経て自分に何ができるか考え出した結果、吉野さんは自らの家を開放し、被災体験を他の土地から来た人々に伝えるという方法を選んだのである。

震災が起きてから山元町の人々は多くのものを失った。しかし、その中でも「伝える」ことで住民同士つながり合い、連携をして苦難を乗り越えてきた。そして震災以降もつながりは絶えることなく継続され、今度は震災を知らない人にも自分たちの経験を伝えている。伝えることでつながる、これは日本社会全体で必要なことなのではないだろうか。自殺の問題や高齢者の孤独死など、物が豊かになった現代社会で、心の豊かさとの差が問題となっている。それに対し SNS の普及やビアガーデン、市民マラソンなどのイベントブームは、希薄になってしまった人と人とのつながりを人々が欲していることの表れではないだろうか。

震災の被災地に対して、支援などを一方的に与えられる側だという認識が多くの人にはあると思う。だが今回の巡検調査で垣間見ることができたつながりの大切さは、被災地を通じて私たちが忘れかけてしまったことを教えられたように感じた。

(伊藤昂大)

私は昨年度に引き続き2度目の山元町訪問であったが、そこで感じたものは、継続して関わっていくことの重要性である。太陽団地、旧中浜小学校、土曜日の会のみなさん、みんなのと

しょかん、工房地球村、民話の会のみなさん、りんごラジオへは昨年度も訪れた。しかしその中でも、みんなのとしょかんの蔵書数が増えていたり、じーたんドームが新たに作られていたり、変化が見られた。町を移動しているときも、瓦礫の撤去工場が解体されていたり、堤防が建設されていたりと、徐々に復興が進んでいる様子を感じられた。たった2度の訪問は継続と言うにはあまりにお粗末なものであるかもしれない。しかし、そのたった2回の中でも確実に町は変化しており、気づくこともできる。たった1年で人や町は大きく変化するのである。特に、今回ヒアリング調査に協力してくれた中学生という時期は、1年間でさらに大きく変化するだろう。彼ら・彼女らが今後どんな力をつけ、いろいろなことを吸収して成長するのか、できることならばまた来年度も話を聞いてみたい。

土曜日の会のメンバーで、普門寺の住職である坂野文俊さんも、継続して訪れることの重要性について述べていた。坂野住職は「継続して来てくれることによって信頼関係を築いていくと、今まで出さなかった部分や、見えていなかった部分が見えてくる」とおっしゃっていた。フィールドワークにおいて、これで十分というものはなく、繰り返し訪れ、地域に深く入っていくにつれて、さらに新しいものに気づくことができるのだろうと感じた。

一方で、震災の恐ろしさを伝え続ける旧中浜小学校、町のために放送しているりんごラジオなど、変わらない部分、変わらないでいてほしい部分というものもあった。変わっていく部分だけに目を向けるのではなく、変わらない部分にも着目していく必要性もあるだろう。「変わったもの」への評価はもちろん、町の人々にとっては毎日当たり前のよう存在している「変わらないもの」に対して再評価するという役割を、外部から訪れる我々学生は担うことができるかもしれない。

1年ぶりに訪れた山元町では、前回にも増して多くのことを学ぶことができた。これからも継続して山元町を訪問し、さらに深く地域の人々と関わっていきたいと思うとともに、山元町の方にも関わって良かったと思えるような活動にしていきたいと思う。

(藤田悠佑)